



Title	雲に抱かれて
Author(s)	クリシュナー, ソーブティー; 長崎, 広子
Citation	印度民俗研究 別巻. 2016, 5, p. 3-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56217
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

雲に抱かれて

クリシュナー・ソープティー

訳 長崎 広子



ブワリー高原¹の小さなこの山荘で横になり、僕は眼前の山々を眺める。瑞々しくも乾いた雲の塊。眼を持たない霧^{もや}はむなしく彷徨い格闘している。また横になり、自分の衰えた身体を見る。正面の山の荒々しい緑のなかをラームガル²の町に続く獣道が、僕の腕に浮き上がる血管みたいに光っている。山風は僕の落ち着かない息に似て、ときに激しく、ときにゆっくりと、この窓にぶつかると、ときに激しく、ときにゆっくりと、この窓にぶつかると、ときに激しく、ときにゆっくりと、毛布にはさまれた身体は、石灰のもろい塊みたいに崩れていく。歳月という縦糸と横糸で編まれた命の鼓動は、一瞬ごとに止まりそうな不安に怯えながら、そうはならなかった。

寝ている。朝がくる。

寝ている。夕刻になる。

寝ている。夜の帳が下りる。

扉と窓にかかったカーテンは、僕みたいに朝も昼も夜もさみしく無言でぶらさがっている。誰かがそれに手を伸ばし、部屋に向かって引くことはなかった。敷居のところ突然やつてきて微笑む人はいなかった。朝と夕暮れと夜は順番にベッドのそばにきて取り囲む。うつろな眼で暗闇と曙光ではなく、鉄のべ

¹ 中国とネパール国境近の北インドの高原避暑地。ウツタラーカンド州ナイニータール県ボワリーと発音する場合もあるが、ヒンディー語原文の表記に従いブワリーとした。
² ブワリー高原から北東約二〇キロメートルに位置する避暑地。ブワリーやナイニータールに避暑に訪れた旅行者はさらに北の町ムクテーシユワル等へ向かう際に立ち寄ることが多い。リングゴをはじめとする果物の産地としても知られ、雪のヒマラヤの屋根を臨むこの小さな町は、インドの文豪たちに愛された。

ッドに横たわる自分を見つめる。命の灯が消えようとしている身体を眺め、ただひたすら見つづける。今日はこのほかに何ひとつできなかつた。何もかも失ってしまった。だらんと肩にぶら下がった腕を見る。あの頑丈な腕はどこにいったのだろう。僕の胸を覆った香りのよい彼女の髪はどこにいったのだろう。僕の唾液で濡れて輝いた彼女の唇はどこにいったのだろう。僕はすべてを持っていった。今みたいではなかつた。寝食を共にするひとがいた。洗いたての枕に頭をうずめて眠りこけると、そのひとがそつとキスをした。「起きないの？朝になったわよ」

眼を閉じたまま、その愛おしい身体を抱きしめ、昨夜の情事の残り香を嗅ぐために抱き寄せた。「こんなに早く起きる必要があるのかい？」

かすかな笑い声：そこで手を離れた。眼を開けると、家はすっかり朝になっていた。花の香りに包まれて、朝食が用意される。洗いたての服を着た若妻は、しつかり者らしく、てきぱきとした仕事で前に座り、夜に見た夢のとおりにして見せた。カップにミルクを注ぐ指に視線を注いだ。この指が僕の髪を撫で、僕を震えさせたあの抱擁をくれたのか。先端をたくし込んで前に膨れたサリーの布は、まるでふたつの甘美を享受するかのようだった。ふと、今の僕はずっと奥深くにある僕自身の覆いなのか、それとも自我はこの僕とは別の、そのずつとずつと下のどこかにあるのだろうかと考えた。とてもゆつたりと、しかし沸きあがる欲求で胸がいっぱいになった。僕がいる。僕を抱くもうひとつの身体がある。そこには甘美な優しさがあり、夜に

波うち揺れる。そして、ひとつの夜がブローリー高原で終焉を待つこの闇に訪れる。毛布の下に横たわったまま僕は薬瓶を眺め、そこに書かれた広告を読む。ごくつと薬を飲んだとき、考えた。身体の水分がなくなれば骨と肉はすべて感覚を失うのだろうか。それを土と言うつもりはない。土になれば再び水を含むのだから、いま僕は土にかえりたい。

あのころは本当に楽しかった。心と身体を撫で癒してくれたあの夜を現在の虚無のなかに僕は探している。冬の人気のない沈黙のなかで、突然なにかに命じられて部屋に入った。電球の青い光の下で半開きの疲れた眼を少しあげ、腕に抱かれて眠る赤ん坊を見てはつとした。赤ん坊を抱けるのは、この身体があるからだと言は教えているみたいだった。立ち上がった。ひんやりした額にキスしたとき、愛は肉体の内部で生まれ、肉体から出て、肉体を媒体として人生に存在するのだと思った。

それでもこの世には、山の乾いた雲みたいにくくむく湧きあがっても、雨を降らせるでもなく、ひたすら漂うしかない、異なる種類の愛もある。

もう何年もまえのことだ。ある夏、僕は高原避暑地を訪れ、父の従妹の別荘で初めてあの眼に会った。香かぐわしい朝だった。朝食のテーブルから立ち上がると、彼女を紹介しながらなぜか

叔母は少し口ごもり、溜息をついた。「ねえラヴィ、この娘はマンノーよ。二日間ここにいるわよ」そのぶつきらぼうな言い方は不快感を与えた。息を吸いながら二日と言った様子は、何か苦痛を堪えるみたいだった。マンノーは何も言わず、会釈して少し微笑んだ。はかなげな彼女の表情から眼が離せなかった。痩せてはいたが端整な顔とひつつめた巻き毛は、不満という罰を自らに与えていると感じさせた。

僕たちがテーブルから立ちあがり外に出たとき、子供たちがマンノーの痩せた身体にまわりつき、サリーの端を引っ張って甘えながら腕にしがみついた。「…お姉ちゃん、マンノーお姉ちゃん」叔母は何かの用で部屋に入ろうとしていたが、子供たちの歓声を聞いて引き返してきた。険しくひきつり、緊張を隠した叔母のあの顔が忘れられない。手でぐいっと子供たちを引き離し、マンノーに冷たい視線を投げて声を低めて言った。「マンノー、行きなさい。どこかで散歩してきなさい。子供たちがまとわりついて、お前を困らせるから」母の眼に怒りを感じて、子供たちはさっと離れた。叔母の持てあました手はまるでばつが悪いようにおろされ、睫の濃いマンノーの大きな眼は、見開くでもなく、伏せるでもなく、ただじつと叔母を見つめていた。いたたまれず叔母が眼をそらすと、マンノーはゆっくりと玄関から出ていった。事情を訊かずにはいられなかった。「どういうことですか。何事ですか」

叔母はおし黙っていたが、やがて重い口を開いた。「あの娘は

病気なの、ラヴィ。二年間療養所にいたのだけれど、今は義兄おにいさんがあそこに別荘を買って、古くからの使用人と暮しているわ。独りで退屈すると、少し町にやってくるのよ」

「そんな、ねえ嘘でしょう」僕はとても信じられず、激しく動揺した。

「ラヴィ、四、五か月ぶりにあの娘こに会うと、食欲も何もなくなってしまうわ」

僕は叔母の正直な気持ちを逆なでするように言った。「だけど、子供たちを完全に引き離しては良くないでしょう。少しくらい一緒にいても」

叔母は、お前に何がわかるの、とでもいった鋭い視線を向けて、奥に入ってしまった。子供たちは自分の遊びに夢中になっていた。僕は立ったまま、煙草の煙で身体に感じた恐怖と心に湧いた好奇心を何度も追い払おうとした。この人たちはどれほど息の詰まる思いをしているのだろうか。だが、間違ったことをしているわけではなかった。もやもやした気持ちで外に出て、坂を降りて湖の岸に立った。道に沿って片側に影ができていた。跳ね上がる湖の波は日差しに照らされて白銀色に変わった。女神の寺院の前に着くと、足を止め、手摺に手をかけて湖を行き来する小舟を眺めた。力強い手でオールを漕ぐ若者は、猛スピードでタツリタールの町³の方へと進んでいく。後方の小舟

にはくつろいだ老人が座ってまどろんでいる。そのうしろのポート・クラブの船には外国人の娘たちが：さらに数隻の帆船。

突然、船の上ではなく、水の底にあの青白い顔が見えたような気がした。あの大きな眼、あの痩せ細った腕、叔母の親戚のマンノーが。心のなかでマンノー、マンノー、マンノーと数回繰り返してみる。僕は高い岸の上に立ち、彼女は水に流されていくような気がした。ひつつめた巻き毛、瞬きしない眼。だが、叔母は言っていた、病気なのだと、マンノーは病気なのだと。

手摺から手を離して叔母の別荘を見上げた。中国領の山頂が山脈から頭をもたげ、いつものようにびんとそびえている。それは、落ちそうなごつごつした斜面を手で押さえているみたいだった。

僕は麓のこの道に立つて考えた。何もかもいつも通りだ。ただ脳裏に浮かぶあの二つの眼だけが鮮だった。その眼のむこうには、誰も触れられない、誰にも救えない病が潜んでいる。

別荘に戻ると、子供たちを連れて叔母はどこかに出かけていた。しばらく応接間に座って、叔母の器用な手でしつらえられた飾りつけを眺めた。高価な花瓶に差された高山植物が綺麗だった。キャビネットの上の豪華で大きなフレームに入った家族写真の前に立つと、叔母に寄り添う叔父を見て思った。叔母には叔父の顔のどこに魅力があるのだろうか。束縛され、一日中、

³ 物語の中で名前が記されていないが、叔母の別荘近くの湖とは、ウツタラーカンド州の

人気の高原リゾート地ナイニータールにあるナイニータール湖。タツリタールはその湖の南岸地域で、ポーツィンゲに興じる旅行者でにぎわう。

何年間も責務を果たしつづけられるほどの魅力がどこに。いや、だめだ。別荘に泊めてもらって、こんなことを考えるなんて失礼だ。

もやもやした気持ちで応接間を出て、自分の部屋につづく階段を上った。煙草に火をつけ、湖の南側に面した窓から外を眺めはじめた。緑の山々の大小の赤いトタン屋根とその間を走る小道。叔母は食事の時間までには帰ってくるだろう。きつとマンノーも…。長いあいだ座って古い新聞をめくりつづけた。叔母は帰ってこなかった。時計がボンボンと鳴ると、使用人が促した。

「食事になさいますか？」

「叔母さんはいつ帰るの？」

「食事はしないと出かけてしまいました」

その言葉の意味を、何も意味しないような彼の眼に何おうとした。

「じゃあ、お客さんは？」

使用人は仰々しく頭を下げた。「ご一緒されません。ひとりです。上で食事されます」

深く一服吸って、燃えた煙草の吸い殻を足で踏み消した。おそらく一緒に食事をする恐怖から解放されたからだろう、いや、もしかしたら一緒に食べられない落胆からだったのかもしれない。その日、独りで食卓につきながら何を考えていたのか思い出せないが、ただ、フォークとナイフをガチャガチャいわせてしきりに外を見たことだけは覚えている。

甘いものを口にしたとき、馬の蹄の音が聞こえ、はつとして耳を澄ませた。「それでは、お客さん」

か細いが、しつかりした声。「二時間後に、来れるわね？」

「承知いたしました」

階段で足音がして、おそらく自分の部屋に着いたところで消えた。食器が下げられたが、僕は立ちあがらなかつた。もう一杯コーヒーを飲んだあとも、そこに座りつづけた。ふと思った。ほんの少し紹介されただけで、僕の心をこれほど惑わすとは、すごい力ではないのか。そもそも一目会っただけで、なぜその人のために僕はこんな風になってしまったのだろう。

まる一時間が経って先にあの人の上つていった階段を僕は上った。開いた戸口にかかったカーテンにそつと手をかけた。

「どうぞ」

カーテンを開けて敷居をまたぐと、手にカシミア製のショールを持ち、マンノーがスーツケースの傍らに立っていた。僕を見て驚く様子でもなく、ごく自然に「どうぞ」と言った。それからソファーに散らばった服を取り上げた。「座ってください」腰を下ろしながら、叔母の別荘のなかでここが一番豪華でできちんとした部屋だと思つた。新しい家具。高価なカーテン。淡い黄色い服を着たマンノーが可愛らしかった。

何も話題が見つからない。「昼食は…」

「はい、もう済ませました」じつと僕を見つめていた。

彼女に何か喋らせようと思つて話を振つた。「叔母さんはどこかに出かけたみたいだね」

頷いてマンノーはショールをたたんでスーツケースにしまいな
ながら言った。「夕方になる前に山を降ります。叔母さまには、
一日だけ厄介になるつもりで来たのだと伝えてください」

「叔母さんはもう帰って来るんじゃない？」

彼女がそれに言葉や表情で答えることはなかった。僕は言葉
を探して口ごもり、それからいつになく熱心に訊いた。「もう一
日いられないの？」

彼女は何も返事をせず、スーツケースを閉めながらうつむい
ていた。

少し間をおいて優しい手つきで自分の髪に触れて笑った。「こ
こにいてどうするのですか？あんな大きなブワリーの村に住
んでいて、こんな小さな町に来てつまらないでしょ」

あのときの小さな笑い声と意地悪ではない皮肉が、これほど
の歳月を経た今も、僕にはありのまま、まったくあのときと同
じように聞こえてくる。あの言葉、あの笑い声、顔色の悪いあ
の姿。

僕たちは一緒に階下に降りた。彼女のコートは僕が腕にかけ
て持っていた。使用人と庭師は頭を下げた挨拶し、客人から心
づけを受け取った。

馬丁は馬を軽くたたいて促した。「さあどうぞ、行きましょう」

彼女の震える視線は僕が手に持ったコートに注がれた。

「歩きます。馬を連れて先に行ってください」

馬に乗るように勧めようとしたが、できなかつた。門を出て
彼女は一瞬ふり返った。家と別れを惜しむみたい。それから

すぐに気を取り直して下に降りていった。タクシーが待つてい
た。荷物を積みこみ、運転手は彼女の辛い心境を察したのか、
「ちよつと遅いですね、お嬢さん」と言った。

マンノーは今度は何も見なかつた。コートを受け取ろうと僕
に手を伸ばした。車に乗ると、人夫はさつとうしろから毛布を
取り出し、彼女の膝にかけて訊いた。「ほかに何か？」

巻き毛のマンノーはだらつとシートにもたれた。痩せ細つた
弱々しい腕で膝をさすり、ゆつくりと口を開いた。「いえ、もう
結構です。ありがとう」

半開きのガラスから覗きこむと、彼女の顔には疲労の色が浮
かんでいた。腕には魚型のプレスレット。眼を見ても、その表
情を伺い知ることはできなかつた。生気のない弱々しい視線は
毛布の上にそつと重ねた自分の手に注がれていた。

タクシーは進みだした。僕はうしろに下がり、車は離れてい
った。別れ際に手を振るでもなく、唇が震えることもなかつた。

曲がり角に着くまで、うしろのガラスに映る髪に結ばれた質素
なりボンを見つづけた。それからいつまでも、あの悲しい「あ
りがとう」が脳裏にこだましていた。「いえ、もう結構です」

今でもあの瞬間を思い起こすと、妙な気分になる。彼女の乗
った車を運び去った乾いた道から僕は戻り、湖畔を歩いている。
どんなに自分に言い聞かせても、あの顔と彼女の病が心から離
れない。あの日何度も立ち止まり、疲れきって別荘の坂を上つ
た。思い出すだけで、げっそりしてしまう。

別荘に着くと、ベランダから人夫が家具を運び出していた。

僕の心は激しく動揺した。ということは、あのマンノアの部屋の飾りつけやしつらはすべて料金を払って叔母が揃えさせた借り物だったのか。昼間に叔母に抱いた好感は嫌悪感に変わった。

なかに入ると、戸口に叔母が立っていた。不審げに僕を見て、近づくと、冷ややかに声をかけた。「ラヴィ、手と顔を洗っていらっしやい。むこうに全部置いてあるわ。早くしてきなさい。お茶にするわよ」

無言でバスルームに行った。すべて揃っていた。手と顔を洗う前に、蓋をしたコップに入っていたお湯でうがいした。息のできない束縛から解放されたみたいなきがした。服を着替えてお茶のテーブルについて。子供はいなくて、叔母だけだった。叔母はお茶を注ぎ、カップをさし出した。

「叔母さん！」

彼女は聞かなかつたふりをした。

「叔母さん、叔母さん！」ふと思った。自分は他の誰かを振り向かせるために呼びかけているのだろうか。叔母は仕方なく眼を上げた。何も話したくないことはわかったが、僕は続けた。

「二日いるはずのお客さんがたつた一日で帰ってしまいましたね」

これを訊いてスプーンで自分のお茶をかきませ始めたが、それでも何も答えなかった。その沈黙で僕はさらに残酷になった。

「一日だけのつもりで来たと伝えてほしいって言っていましたよ」

叔母はこれ以上は聞いていられなかった。深い溜息をついて、傷ついた視線を僕に向けた。「もう何も言わないで、ラヴィ」そしてティーカップをそこに残して、部屋から出ていった。

その夜、出張から叔父が返ってくるはずだったが、使用人に尋ねると、二日後になるとの電報が届いたそうだった。一度叔母の部屋に行こうかとも思ったが、躊躇して足が上がりなかつた。いつまでも階段に立ち尽くす自分に気づいたとき、眼の前にマンノアの空っぽの部屋があつた。なかに入つて電気をつけた。すべてが空っぽだった。カーテンも家具もなく、マンノアもいなくなつた。ふと火鉢に置かれた木が目に留まつた。今日彼女がここにいたら、夜遅くまでこのそばに座っていただろう。僕もたぶん今ここに来たように彼女のそばに来て……

こんなことを……僕は何を考えているのだ。なぜ考えているのだ……

何か得体のしれない恐怖に怯えて階下に降りた。窓の外は暗かつた。枕を引っ張り、電気を消してベッドに横になり、ブローリーの村の小さな山荘を眺めていた。もうマンノアは着いたことだろう。

「ラヴィ！」

驚きはなかつた。叔母の声だ。暗闇のなかをそばに来て座り、そつと僕の頭を撫でた。

「どうして？」

その手がほんの一瞬静止し、少し下がつて僕の額まできた。

そして声を詰まらせて囁いた。

「わたしはラヴィじゃなくてあの娘を撫でているの。もうあの娘にこの手が触れることはないから……」

その手を、叔母のではなく、マンローの手を僕は握りしめた。

しばらく何も喋らなかつた。それから、何かに気づいて自分を律するように口を開いた。「ラヴィ、あの娘について何も考えちゃだめ。あの娘はもういなくなるのだから」

僕は叔母に触れながら身震いした。「僕だつて早死にするかもしれないし」

何年も過ぎてブワリー高原で病魔に冒された今、嫌というほど思う。あの夜、僕は自分についてなぜあんなことを口走つたのだろう。昼も夜も僕の心と身体に現実となつて襲い掛かるあの呪われた言葉をどうして口にしてしまったのだろう。あれを訊いて叔母がどう感じたかはわからない。僕の手を振り払つて、立ち上がった。明かりをつけて僕を見つめ、信じられないというようなきつく責めた。「頭がおかしくなつたの、ラヴィ。生きる道が残されていないあの娘と自分を重ねるなんて。もうどうにもならないのよ」

それから椅子に腰かけた。「ラヴィ、お前はあの娘を朝と晩しか見ていないじゃないの。わたしは何年も見てきたのよ。それでも、石みたいにも感じない。あの娘は自分の子供と同じだなんて、言うつもりはない。よその娘を自分の子みたいに思えるわけがないじゃない。でも、あんなに可愛がつて、面倒を

見たのに、すべて水の泡だなんて。まえは休みの日にあの娘が寄宿舎から帰ってくるのを楽しみにしていたのよ。今は来る前から、帰る日が早くきてほしいと思つている。怖くて子供たちを外に連れ出したりして」

その口調が険しくなつた。

「小さいころは可愛くて怖い思いをさせたこともなかつたあの娘を、今はわたしが恐れている。あの娘の病気が恐いの」声の調子が変わつた。「恐くないなんて言う、おまえみたいな度胸はないわ」と言つて、叔母は僕をまさぐつた。身動きせずに僕は黙つて横たわつていた。

叔母は顔色を伺いながらずつと僕を見つめていた。それから自分の部屋に戻るために立ち上がつて止まつた。今度はその声に懇願ではなく警告が込められていた。「ラヴィ、どうにもならないの！ 生きる道がまつたくないあの娘に血迷つちやだめ」

しかしその日の叔母の言葉に僕は従わなかつた。そうしようとしても、できなかつた。

翌朝あちこち歩き回つて一日つぶそうと思つた。馬を走らせてラリーカーンターの丘⁴に行き、その足で戻つてきた。別荘をめざす道すがら、なぜか自分が行かなければならないのは、叔母の処ではなく他にあるような気がした。上り坂の曲がり角でしばらく立ち止まつて考えこんだ。昼下がりにタツリーター

⁴ ナイニーター湖は7つの丘陵に囲まれており、ラリーカーンターはそのひとつの名。

ルの坂を降りたときには、心は決まっていた。

僕が行くべき処はブワリー高原だ。

バスを降りた。バス停に積みあげられたラームガル産のまつ赤なりんごを見て、これがブワリー高原とは思えなかった。そこは息苦しい場所のはずだとバスに乗って考えながら来た。しかしヒマラヤ杉の高い木々からそよ風が吹き、高くそびえた木立、日光は地面を照らしていた。そこは気持ちを癒し、身体に良い処だった。十字路を通って郵便局に行き、別荘の住所を調べて、小さな山のバザールの一角にあるパインズ荘に向かった。広々とした道の曲がり角から綺麗な細い道が上に伸びていた。手摺から見渡すと、山と山の間の一つの広い峠がつづいていた。膝にかけられた刺繍のシヨールのように、曲がつたりまっすぐの小さな畑は大地に広がっていた。正面に見える遠くの南の湖は陽に照らされて銀の食器みたいに輝いていた。

こうして初めてブワリーに来たのち、僕は一度ならず何度もここを訪れた。何度もここに戻ってきた。だがあのとときと同じように来ることは二度となかった。僕は歩いた。歩いた。何も考えずに。マンノーのもとに向かっていると考えると考えなかった。僕は歩いているとすら考えなかった。ただひたすら歩いた。

ある木の幹にパインズ荘と書かれていた。木の門を開け、並んだ植木鉢にそってベランダまで行った。音を立てないようにカーペットにそつと足をのせて、扉をノックした。すると腰の曲がった老練な男がこちらに向かつてやって来た。これが古く

からの使用人だとすぐにわかった。

「おられますか？」

「お嬢さんのことですか？」

僕は頷いた。

「お嬢さんなら下の池に降りて行かれました。もう帰って来られるはずですよ」

屋外で座って待った。マンノーはまもなく帰ってくる。帰ってくるはずだ。帰る途中だろう。

疲れて、門に背を向け寄りかかった。マンノーは遅くなるのかもしれないと僕が考えるころには、帰ってくるはずだ。

馬の蹄の音が聞こえた。はやる気持ちを押さえて振り向かなかった。

「おじさん！」

年取った使用人は急いで馬に近寄り、愛おしそうに声をかけた。「お嬢さん、降りてください。遅いじゃないですか」手を差し出した。

マンノーはその手につかまって下に降りた。「ちよつとおばさんをお呼びで、おじさん。気分が悪いの」

「大丈夫ですか？お嬢さん」

心配そうな声を聞いて少し笑った。立ち止まり深呼吸した。「元気よ、おじさん。布団を敷くように大おばさんに言つて」使用人は彼女のために椅子を引き、遠慮がちに訊いた。「お嬢さん、休みますか？」

「ええ、おじさん」

今度は悪いことをしたみたいに気兼ねして、彼と目を合わせなかった。僕の方を向いて言った。「お待たせしました?」

「いいえ!」僕は頭を振ったが、眼は否定しなかった。少しして偉そうに尋ねた。「気分が悪いのですか?」

マンローは一瞬疲れた瞼を閉じ、何も言わなかった。

年取った女がシヨールを持って走ってあらわれた。それを彼女の肩にかけて、自分を慰めるみたいに言った。「お嬢さん、心配しなくて大丈夫ですよ。すぐに直ります。こちらさんにお茶をお持ちしますか?」

マンローは答えに窮して、少し考えていた。「おばさん、飲まれるかどうか、お聞きして」

僕はよく理解せずに慌てて言った。「いえ、今は飲みものはいりません」

マンローは何も訊かず、僕を見てもいないようだった。

それから、僕を紹介することが重要だとおばさんに教えるように、尋ねた。「叔母さまはお元気ですか?もう叔父さまはお帰りになったのではないかしら?」

使用人の女は僕が叔母のところから来たことをすぐに理解した。「来る前に知らせてくださったら、お嬢さんのために何か買ってきてもらったのに」

「おばさん、なかに行つて見てきてくださいな。疲れたので、座っていられません」

きまり悪く僕は座りつづけた。果物が少し運ばれた。

マンローはしばらくこちらの表情を伺っていた。やがてゆつ

くりと僕にはなく自分に語るように呟いた。「ここには何も持つて来ない方がいいし、ここから何も持つて帰らない方がいい」

僕は自分の無知を後悔した。

マンローがなかに入ると、勝手について行つた。毛布をめくつて大おばさんはそこにマンローを寝かせ、髪をほどきながら額に触れた。それから僕のために椅子をそばに置いて出ていった。

「マンロー!」

何も答えなかった。瘦せた腕を少し伸ばし、何か思つて、とつさに引つ込めた。

僕自身がマンローみたいになつた今、何百回でも自分の命にかえてあの時間を取り戻したいと思う。どうしてあの手に触れずに、椅子に座りつづけたのだろうか?どうしてあの手を握らなかったのだろうか?湧き上がる気持ちを何かそこに縛り付けたみたいに、僕はじつと椅子に座りつづけた。

あの戸惑いにあつたものは何か?躊躇した心にあつたものは何なのだろうか?現在の僕から愛しい人たちを遠ざけているこの恐怖があつたはずだ。あの夜帰ろうと立ち上がったとき、眼に抱いた愛しさは僕をそこに押しとどめ、心に感じた恐怖は急いで帰れと引つ張つた。足早に保養所までたどり着いたとき、解放されたのだ、一瞬ごとに締め付ける束縛から逃げきれたのだと安堵した。あの不幸な夜に味わつた解放感が僕にとつてどれほど大きかつたのか、今マンローが知つたら…。

その夜はよく眠れなかった。夢のなかで何度もこんな錯覚にとらわれた。僕はブワリーにいる。ブワリーで寝ている。

ここはパインス荘の大きな窓のある彼女の部屋だ。マンノールのベッドに横たわり、傍らには椅子に座ったマンノールが両眼で僕をじつと覗きこんでいる。僕が手を伸ばすと、彼女は少し笑って頭を振る。…いけません。手を毛布のなかにしまってください。誰が触るのですか？…

マンノール！

彼女は無言でただ笑った。一晩中この夢を彷徨って眼覚めると、叔母の顔が浮かんだ。…どうにもならないのよ、ラヴィ：

その朝、宿泊所にもブワリーの村にもいたくなかった。バス停に着くと、日差しのなかに沈むこの場所が怖かった。もう一度自分の気持ちを確認した。「パインス荘。いや、そうじゃない。違う。帰るんだ」

別荘に着くと叔母がいた。激しく警告する、緊張した面持ちだった。僕を睨みつけ、息を止めるようにして問いただした。

「昨日はどこに行っていたの？」

「ラーニーケート⁵まで行ってきました、叔母さん」嘘をついた。

「どうして前もって言えないの」

⁵ ラーニーケートは叔母の別荘のあるナイニータールよりも北にある町。マンノールの暮らすブワリーはナイニータールの東十一キロメートルの距離にあるが、彼女に会いに行つたことを言えずに、方角の異なるラーニーケートの名を告げている。

僕は何を血迷ったのか、「叔母さんに断るらなきゃいけないことですか、」と口に出してしまった。

昼に叔父に会った。昨日帰宅していたのだが、いつもながら陰気な人だ。食事中はずつと叔父の顔を眺めていた。突然皿から眼を上げ、叔母に視線を向けた叔父を見て、叔父の兄がマンノールの父親に違いないと確信した。その眼差しに彼女と同じ落ち着きとあの揺るぎない強さを秘めていた。

叔父は食事を終えて立ちあがり、かすれ声で訊いた。「ラヴィ、君の叔母さんは君の故郷のラクナウに行きたいそうだ。送つて来てくれるかい？」

「はい、わかりました」

叔母と子供たちと一緒にナイニートの町から下山した。僕はうしろのシートに座って、この町との突然の別れを煙草の煙で忘れようとした。広い曲がり角でバスは下に向かって折れた。窓から外を眺めると、山の緑のなかに昨日いた白いブワリーの村が見えた。

カートゴードラムを経由してラクナウに着いた。叔母の嫁ぎ先で一泊し、いとまごいをするために行くと、叔母が尋ねた。

「どこに行くつもりなの、ラヴィ。もうしばらくここに泊まっていますよ」

「いいえ」

叔母はこの「いいえ」をすぐに受け入れることはできなかつた。そばに座らせ、しばらく僕を見つめていた。やがて優しく

声をかけた。「またどこかに行くの？」

「わかりません」

叔母は何か言おうとしたが、口ごもった。途切れとぎれに話した。「ラヴィ、お前の叔父さんはお前にナイニの町に戻っておいでって言っていたわよ」

「やめておきます。今度は南に行きます。父のところへ」

信じていない様子だった。何か思い出すように「ラヴィ、今回は楽しくなかったのね」と言った。

「そうじゃないんです。そんなことはありません」

叔母は何か尋ねようとし、僕は叔母に何か言おうとしたが、ふたりとも言葉にならなかった。

駅に向かうとき、僕は叔母の足に触れて挨拶した。それほど年が離れているわけではなく、父の母方の従妹で一番若かったのだが、気持ちは叔母からの祝福が欲しかった。

彼女はびっくりして、それから笑った。「ラヴィがわたしの足に触れたのだから、もちろん祝福してあげるわよ。とても綺麗なお嫁さんが来ますように！」

僕は笑うでもなく、照れるでもなかった。叔母は黙りこんだ。冗談めかして言ったことだったが、見知らぬ戸惑いがその気持ちを覆い隠してしまった。

切符を買ってポーターに荷物をあずけ、僕はプラットホームをぶらぶらし始めた。上下線とも列車は来ていなかった。線路上にがらんと広がる空間が憂鬱な心を解き放ってくれた。それ

まで考えていたことを考えながら僕はその地をあとにした。心をブローリーの村に残すこともなく、パインズ荘にも、マンローにも残すことはなかった。過去はすべて過ぎ去ったことだと思つた。叔母の祝福の言葉は想像のなかで真実味を帯びた。家庭を持ち、妻を迎えて、僕は……

祝福の言葉は嘘にはならなかった。本当に僕は家庭を築き、美しい妻がやって来たのだ。自分で娶って連れてきた。だがしかし、あの日切符を買った列車が、プラットホームから僕を連れていったわけではなかった……

列車が入り、ポーターが荷物を積みこんだ。僕は外に立ってあたりを見渡した。旅行者、ポーター、荷物、子供、老人……

「お客さん、発車まで一〇分です」

自分の時計を見て、わかつていると頷いた。

ポーターはもう一度車両に乗り込んで、身の回りの物を上げたり下げたりしたのち、ターバンを直しながら外に出てきた。

「青信号に変わりました、お客さん」

信号の方を見た。それを見ながら歩き出した。あの身体、あの痩せた身体、あの清らかな顔。あの……あの……衝動的に言った。「荷物を下ろしてくれ」

「お客さん！」

「急いで、早く」

ポーターがまた僕の荷物を運んでいる。切符を払い戻して買

いなおした。駅で果物を籠に詰めてもらい、チャイを飲み、パ
レリー行きの列車に乗りこんだ。行くべきところに行つて暮
らそう。自分で踏みとどまることができずに、他人が僕を
引き止められるはずがない。どうして止められようか？



……家の前の芝生に座り冬の夕日のなかでまどろんでいると、
なかから母が出てきてそばに座った。「ねえ、せっかく帰省した
のだから、今回はゆっくりしていきなさい。何度も縁談を断つ
て、いやな子ね」

母の言葉を聞いて一人前の息子みたいに笑った。母は実に正
しいことを言っていると思った。自分の稼ぎで暮らし、人一倍
稼いでいる。だったら縁談を断る必要があるのか。母の予想に
反して、僕は大きな声で答えた。「お母さんがいいと思うことが、
僕もいいと思うよ」

「じゃあ、お見合いする？」
「いいよ、お母さん」

母は心のなかで笑ったように見えた。

食後に夜の散歩から戻ると、部屋は静まりかえっていた。心

も穏やかだった。初めて女性に会うときに大学時代に感じたそ
わそわするような好奇心はなかった。一人暮らしをするうちに、
誰かと連れ添いたいとは考えず、それを自分の権利として受け
入れていた。

手に本を持って寝床に入ると、読むうちに飽きてしまった。
眼を瞑って暗闇を見つめた。僕はどこかの山を登っている。遠
くにヒマラヤ杉の木立が見える。さみしい空だ。自分の足音以
外になにも聞こえない。突然誰かの声があちこちで反響した。
すると闇のなかを揺れながら、ひとつの手がどんどん進んでき
た。僕の首に向かって、近づいてくる……

瘦せた手首。細い指。僕は恐怖に慄き、あとずさりして、慌
てて眼を開けた。

起き上がってカーテンを開け、窓の外を見た。庭の右側の青
い芝生の上に父の部屋の明かりが広がっているのを見て、ほつ
とする。深呼吸して自分の髪に触れると、額が冷たかった。恐
ろしい孤独な闇のなかのあの手……あの手。

心では忘れていたものを、今日どうして思い出したりしたの
だろう。なぜ思い出さずにはいられなかったのだろう。何年も
前にパインズ荘の坂を降りながら僕が最後に眼にしたあの手を
どうして今日見なければならなかったのだろう。あの手に触れ
たわけでもないのに。何度も考えて触れようと手を伸ばしただ
けでは、触れたとは言わないはずだ。

……一か月間ナイニの町に僕は滞在し、そこから何度もブ

ワーリーを訪れて、最後と思つてマンノアの別荘から戻ると、着くとそれを最後の訪問にしたくなかつた。三回坂を降り、三回坂を上つた。

マンノアはショールにくるまり安楽椅子に半ば横たわつていた。そばに立ち、彼女が纏つた沈黙を引きはがそうとするみたいに、陰気な声をかけた。「明日ナイニの町から下山するから」マンノアは足下に広がつたショールをそつと整えた。一か月前の顔に戻つていた。あのよそよそしい視線、あのはかなげな表情…。

マンノア…。彼女に何か言いたかつたが何を言つたらいいのだろう。また来るよと言えいいのか？

何度も自分自身には、来るよ、また来るよ、と言つた。だがマンノアが僕を見つめる眼は、何も語らずとも、あなたはもうここには来ないのでしよう、と言つていた。

「マンノア」

「ラヴィ」そして…そして、ただ辛そうにかすかに笑みを浮かべて、彼女は胸の前で手を合わせた。「さようなら」

合わせたその手を僕はじつと見つめた。別れを告げようと少し近づいたのに、なぜか立ち止まつてしまった。

促すようにマンノアは言つた。「遅くなりますよ、ラヴィ」凝然と見つめていた眼を伏せると、僕はそそくさと坂を降りた。

僕はまた戻つてくるだろう…また。だが永遠にここを去ろうとしているのだろうか。

振り返ると、引っぱられるように立ち止まつた。マンノアはその場に同じ姿勢で座つていた。僕が戻つてくることを彼女は知つていたみたいだ。そばの椅子を指差して「座つて、ラヴィ」と言つた。その声には悲壮感も、別れの辛さも感じられなかつた。僕が戻つてきたことに驚く様子もなかつた。何か言いたいのと尋ねるように、視線を注いでいた。

僕は子供っぽく甘えた。「マンノア、帰りたくない」

彼女はじつと見つめた。何か、何でもいいので言葉をかけてほしかつた。

小さな息が、ほんの一瞬彼女の喉で止まり、それから厳しい口調になつた。「いつか帰らなくてはならないでしょう、ラヴィ」僕は彼女の身体をこの手に抱きしめたかつた。そうでなければ、その声に触れたかつた。キスしたかつた。「マンノア！」近寄ると、制止し諫めるみたいに、マンノアは両手を前に伸ばした。だめ。

「マンノア！」この思いを彼女に届けたかつた。

「だめです」この否定の先はない。もう何も。

マンノアは痩せた手を振つて、眼で僕に別れを告げた。僕は仕方なく、自分に言い聞かせるように、下に降りた。眼の前が真っ暗になつたような気がしたが、何とか持ちこたえ、気を取り直して、もう一度振り向いた。

そのとき本当にこんな景色が見えたのだ。湖の岸に立つ僕。ボートに乗つたマンノアが去つていく。彼女は僕を見ていない。見ようともしなかつた。彼女の眼を彼女自身の手が覆い隠し、

視界を遮っている。

手をあてたマンノアの顔がうつむいた。おそらく眼は閉じ、濡れていたはずだ。ひどく傷ついた彼女の自尊心を思うと、胸が苦しくなった。

重い足取りで門まで行くと、すすり泣きが聞こえて足が止まった。

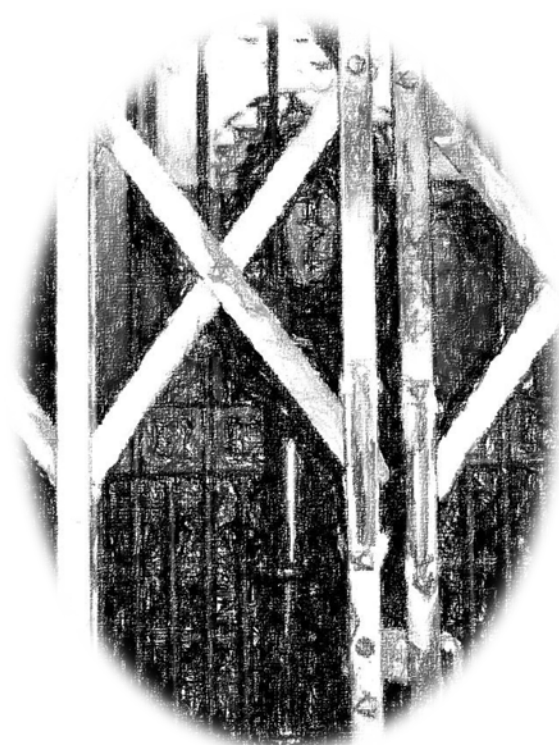
心の奥で繰り返した。マンノー…マンノー！

僕の心の声を打ち消すように「止まっちゃだめ、立ち止まっちゃだめ」と言う声が聞こえた。

もう僕は立ち止まらなかつた。坂道を降りていった。一歩一歩遠ざかっていった。あの別荘から、そこに住むマンノーから。彼女のあの二つの眼から。だが彼女の思い出から遠ざかることだけはできなかった。マンノーを今も思い出す。今日も思い出した。今日もあの思い出がよみがえってきた。一緒に大きな湖の小道を歩いたあの昼。甘くせつない日。優しい青白いあの顔に出会って、水に飲み込まれるように初めて恋に落ちた日。瞬きもせずに彼女の巻き毛を見つめた日。ゆっくり歩き、疲れても肩は落とさない、シヨールにくるまれたあの背に見惚れた日。

……参拝に行つて最後の曲がり角に来たときのことだった。うっそうと茂る大木の下に小さな女神の寺院がふたつあった。錫製の扉は閉まっていた。特になんとも思わず行くとしたところでマンノアの姿が眼に入り、足が止まった。彼女は立ったまま何か考えこんでいた。それから靴を脱いで裸足になり岸辺

の石のうえを降りていった。大きな石で立ち止まり、かがんでハスの茎を折って持ってきた。僕は無意識に、その様子を眺めつづけた。シヨールを頭にかぶった彼女は、閉まったその扉の前の敷居に花を置いて、頭を下げた。



寺院の閉まった扉の前で額をつけて立ち上がったマンノーは、まるでマンノーではないみたいだった。このかがんだ影は彼女のものではなく、運命の閉ざされた扉の前で額づく彼女の虚無感に見えた。この残酷な孤独をまえにして、僕の心は激しく動揺した。泣きそうになりながら声をかけた。「マンノー、お参りしたいのなら、係の者のいる場所を訊いてこようか？」

返事をする前に咳払いして、頭を振った。「いいえ、ラヴィ。そういうことではないの。わたしは願ひ事なんてしないわ。わ

たしにはもう扉は閉まっているのよ。ただ、もう会えなくなつてしまった人たちには、この扉がずっと開いていてほしいと思つただけ」

これまで僕を苦しめ押しとどめてきたマンノーに触れる恐怖、彼女の病を恐れる気持ちは一気に消え去っていた。湖の冷たい風になびく巻き毛に覆いかぶさり、彼女を腕に抱きしめた。「マンノー！」

彼女は驚かなかつた。肩に置かれた手をそつとはらい、眼を凝らして見つめた。「ラヴィ、自分で支えきれないものに手を伸ばすのはやめて」

その声には非難も嫌味も憎しみもなかつた。ただ言おうとしたことを言つたまでだつた。彼女の言葉にその日は何も返せなかつた。何度彼女の処に行つても答えが出せなかつた。泣く彼女を残してパインズ荘の坂を最後に降りた別れのときですら、何も言葉がみつからなかつた。無力ゆえに臆病者の僕が怯えたものが、今の僕の身に降りかかつている。現在の自分とマンノーに対して、自分の不甲斐なさを悔やんでも悔やみきれない。

……その日、家は賑やかだつた。母には美しい嫁、僕にはすばらしい妻がやってきた日だつた。無邪気に笑うミラーを見ると、どこかに隠れてしまいたい気持ちになつた。だが今更どうして隠れなければならないのか。すでに僕は鎖に繋がれてしまったのだ。このまま生きていこう。親戚がいて、友人兄弟がいる。結婚を控えた家に響く甲高い笑い声を訊いて、うれしさ

で胸が躍つた。結婚の準備は実に大変だつた。ある日始まつた話が、結局まで進められる。これほど心を傾けて行われるものが結婚以外に何かあるだろうか。満たされ、支えを得たところで、つまり休止になる。心と身体、家と扉、内と外、すべてがひとつの愛に包まれる。明日はミラーを連れて海岸に行こう。一カ月間実家に滞在して、いままで僕が根無し草みたいに暮らしてきた場所に向かおう。

果てしなく広いその海岸で抱き合い、僕たちは何時間も歩きつづけた。ときどき足を止めて、思いのままに、自分に秘めた自分の愛にキスしあつた。朝と晩、昼と夜が、いつ暮れ、いつ終わったのか、僕たちは見ていながら見ていなかった。

その後の十年間はあつという間に過ぎていった。家族と暮らし、別れとは無縁の魅惑的な日々。ミラーと子供たちと離れてこの山荘に横たわりながら、今日も過去を振り返ると、とても近くに誰かの呼吸の音が聞こえてくる。

僕たちはどれほど幸せだつたのだろう。客観的にこれに答えを出したいと思う。だが、誰かに触れて何か言いたくても、聞いてくれる人はそばにいない。ミラーは子供たちのために僕に、執着を捨てさせたのだつた。

先月ラーニーケートに行く途中で、ミラーは子供たちを連れてまる一時間ここに立ち寄つた。ベランダで横になりながら、三人が坂を登ってくるのを見ていた。玄関に着くと、ミラーは一瞬立ち止まつた。そして両手で子供たちを抱いてなかに連れてきた。

「ムンナー、ラーニー。挨拶しなさい」

子供たちは僕の方を向いてこわごわと両手を合わせた。

それを見て胸がいつぱいになった。僕の運命は僕を見捨てて、遠くにいつてしまった。子供たちは驚きの眼差しで僕を見て、母の言いつけを忠実に守った。

ミーラーはここにいたあいだ、ずっと涙をぬぐいつづけた。何か話したり、訊こうとしても言葉にならなかった。自分の可愛い子供たちを、僕は怖くてよく見ることができなかった。ただミーラーを見ていた。今日僕に会いにきたこの女性のなかのどこに僕の妻はいるのだろうか。確かに僕のものだったあの妻はどこにいったのだろうか？

涙のあふれる眼でミーラーの首に巻かれた時計を見る残酷さに辛くなって、僕は茫然と無愛想な視線を門の方に向けはじめた。家族はまもなく僕をここに独りぼっちにして去っていくだろう。ふと思った。子供たちを抱くミーラーの両腕を自分の方に引き寄せ、「君を行かせない、絶対に行かせない」と言おう。だが、子供たちの小さな眼に浮かぶよそよそしさがその衝動を断ち切り、消してしまった。

ミーラーがそばに来てかがみこみ、僕の額にキスしてそつとうしろに下がるのを見て、驚いた。身体を起こした。今一度愛撫しよう、もう一度愛撫したい。手に顔をうずめて泣くミーラーが近寄って、僕の手に触れた。

彼女の眼につられて濡れた自分の眼を拭き、あたりを見回したときには、切れた堰がすべてを洗い流したあとだった。そば

にミーラーはいなかった。子供たちもいなかった。

枕を支えに頭を起こして眺めると、坂の三つ目の曲がり角を三人は歩いていった。ミーラーは僕に背を向け、坂を降りていった。子供たちは互いに指をからませ、母を見たり、道を見たりしているのだろうか。

息をひそめて待ったが、誰もうしろを振り返らなかった。ミーラーも息子も：ただ幼い娘ラーニーの髪に結んだバラ色のリボンがいつまでも揺れながら僕の眼に語りかけていた。「パパ、行くわね、パパ、さようなら！」

本当にみんな行ってしまった。彼らに行かなくてはならない理由があつたわけではない。僕がこの世を去ろうとしているからだ。彼らと同じように、まもなくマンノーが死ぬことを知りながら、僕はあの坂道を下つたのだ。僕みたいにマンノーも泣いていた。手に顔をうずめて泣くことが、どんなにさみしい涙かということは今ならわかる。だがあの日別れてから、何年間もマンノーを思い出すことはなかった。夢のなかに、彼女の瘦せた身体と、大きな眼と毛布の上に置かれた瘦せた腕が現れると、ぎよつとして眼をさまし、僕は激しくミーラーにすり寄った。

ある日出張でラクナウに行つたとき、叔母に会った。しばらくたわいのない話をしていたが、急に声の調子が変わつた。「ラヴィ、マンノーはもういないのよ」

「そんな、叔母さん！」

父親になろうとしていた僕は、動じまいと必死に堪えた。「嘘でしょう。嘘でしょう…」

叔母は何年もまえのあの頃のラヴィに語るように話した。「夜寝ると、眼を覚まさなかつたの。おばさんは休暇中で、朝心配した人が部屋に入ると、もう息をしていなかった」

僕は声を詰まらせ、何かを尋ねるみたいに言った。「叔母さん！」

叔母は眼を拭きながら少し考え、苦しそうに言葉を返した。

「ラヴィ、一度くらいあの子に手紙を書いてくれたって！」

僕はハンカチで涙をぬぐいはじめた。

「おまえ宛ての荷物を棚に置いていったわ。開けてみたら、セーターが入っていた」

次の日叔母をもう一度訪ね、急いでその足に触れて挨拶した。

「じゃあ、叔母さん…」

「ラヴィ！」叔母の声は昨日のままだった。

僕は頭を振り、ひどくやりきれない声を出した。「もういいのです、叔母さん。もう」

僕が何も知りがつていないことを察し、心のなかでマンノに優しく語りかけるみたいに、叔母は呟いた。「何度も何度も考えている。あの娘の優しい気持ちにすら誰も触れられなかったなんて、どうしてあの娘はあんなに不幸せだったのだろう。どうして…」

ラクナウから戻って数日間はマンノーが頭から離れなかった。パインズ荘で椅子に座る彼女が僕のためにセーターを編んでいる、あの手、あの光景が眼に焼き付いていた。

一年間自宅で病に伏せたのち、ある日僕はブワリー高原にやって来た。あのときと同じヒマラヤ杉の涼しい風が吹き、あのときと同じ心地よい日差しが降り注いでいる。あのときのブワリーの町のままだ。あのときの僕がいた。だが今回は住所を調べるために郵便局に行く必要はなかった。パインズ荘の向いの山に何の因果でか建った山荘に初めて寝たとき、胸がいっぱいになって一晩中ひとつの名前を呼びつづけた。マンノー！！：マンノー！！：。今彼女が生きていたなら、僕は支えてみせるのに…。

毎朝起きてベランダからパインズ荘を眺め、心のなかで話しかける。マンノー：マンノー…。

長年連れ添った妻ミラーにはもはや親近感を覚え、自分の女だとは思えなかった。ミラーに何度も触れ、何度もキスをした。だが心に愛情と愛おしさが沸きあがると、それは彼女に対してではなく、マンノーのあの眼に対する親しみだった。

窓のそばで寝ながら、孤独に耐えて外を眺めると、靄の立ちこめた雲のなかに、巻き毛のあの顔が浮かんでくる。あの顔が…。

葉が変わって新しい色になるたびに、死期が迫るこの身体から僕の意識が消える日も遠くないことを知る。そのときは窓から外を眺めて、この雲に包まれよう。…そうして抱かれて雲の

ひとつになるう…。



解説

この短編小説『雲に抱かれて』原題 *Batalom ke ghere* は、ヒンディー女流小説家の草分けともいえるクリシュナー・ソープティイが一九五五年に書いた作品である。初期の代表作で、同題名の短編集（一九八〇年出版）に収録されている。

ソープティイは、一九二五年に現在のパキスタン領のグジュラートに生まれ、イギリス領からの分離独立期に移民としてインドに渡った。インド文学会では最高の荣誉とされるインド文学協会賞を一九八〇年に長編小説 *Zindagi nāma* に対して与えられ、他の追隨を許さないヒンディー文学界の重鎮である。

性描写がタブーであるヒンディー純文学でありながら、女性の性を赤裸々に描いた *Mitro marqam* は彼女の代表作のひとつである。多くの作品で因習、戦争、病、死といった抗うことのできない運命に翻弄される女性の生きざまが精緻な心理描写をとおして描かれ、この作品『雲に抱かれて』も彼女のそうした文学的特徴がよくあらわれた一作である。本作の語り手である「僕」は、ある夏の日に北インドのブワリー高原を訪れ、叔母の別荘で不治の病に冒された美しい少女マンノーに出会い、一瞬にして恋に落ちる。彼女の病名は記されていないが、接触を許されないことから、感染性の病、結核ではないかと推察さ

れる。愛しいマンノーに触れたたくても触れることのできないもどかしさが、否応なしに「僕」の恋心を煽り苦しめるさまがよく表現されている。だが「僕」は、マンノーと別れ、美しい妻ミーラーと結婚し、家庭を築く。マンノーとミーラーというふたりの女性は「僕」にとって対照的な存在である。病弱なマンノーが死と対峙するのに対して、快活なミーラーはまさに生象徴そのものである。ミーラーと「僕」が肉体的な接触を通して深める愛情には生きるエネルギーが溢れており、それは官能を匂わす小説冒頭の表現によつて印象的に描写されている。また、病に感染することを恐れてマンノーに触れられなかった臆病者の「僕」とはちがいが、妻ミーラーは死を前にした「僕」に触れてキスし、「僕」のできなかったことをいともあっさりやつてのける。しかし、病魔に冒された「僕」が死期を前にして安息を見出した愛のかたちは、妻ミーラーや家族との結びつきではなく、触れることのできなかつたマンノーに対するものであった。この点は、保守的なインド人読者の期待を裏切らないが、肉体のなかに生まれる実体を持たない愛がこの世に存在するのは肉体がそれを形づけているからだ」と「僕」は強く意識し、その愛のかたちを象徴するものとして描写されている妻ミーラーとの官能的なシーンは、ヒンディー文学としてはかなり大胆であるといえる。また、年齢の近い叔母と「僕」が互いをマンノーに見立てて触れ合う夜は濃艶であり、あふれる感情を歪んだかたちで慰め合う二人の姿には戦慄さえ覚える。肉体をとおしての愛かプラトニックな愛か、ふたつのあいだで揺れ動く心

理が丹念に描きだされた本作は、その後の *Mitro murjani* につづく萌芽と位置づけられよう。

凝った表現、オリジナルの言葉使いは、作品の魅力である。冒頭から雲に「瑞々しくも乾いた」と相反する、矛盾した形容詞を用いることでも、翻訳者を大いに困らせた。ここはあえて原文どおりに訳出したが、マンノーについては、原文では「遠くに感じられる顔」と表現しているところでは、作品の味わいを損なわないように配慮しつつ「はかなげな表情」と意識した。多くの言葉づかいと表現に対して同様の翻訳をしたことを、お断りしなければならない。

なお、時間軸を無視して交差する後半の回想シーンに、一瞬戸惑い、読みにくさを感じるかもしれないが、これもソープテイの巧みな物語構成のひとつである。肉体が朽ちようとしている僕の混沌とした意識が思いのまま彷徨うさまが、回想シーンの混乱にあらわれていると解釈されよう。

ソープテイは九十歳を迎えた。毎年ノーベル文学賞の候補者のひとりとしてその名をあげられて久しいが、受賞には至っていない。だが意外なことに、日本では彼女の作品はほとんど紹介されていないため、この作品を選んで翻訳紹介した。

“बादलों के घेरे” (1955)

© कृष्णा सोबती
बादलों के घेरे, राजकमल प्रकाशन,
1980

後記—クリシュナー・ソープテイー女史との出会い—

2016年3月7日、クリシュナー・ソープテイー女史にデーリーのご自宅でお会いすることがかなった。高齢のため、人の助けを借りて歩くことがやっと可能であるにもかかわらず、ソファーに座って2時間余り、作品やこれまでの人生について熱く語ってくださった。インドがイギリスから分離独立する以前の現パキスタンに暮らしていたころは、家では男性はウルドゥー語を、女性はヒンディー語を話していたため、自分の言語は純粋なヒンディー語ではないこと、そのためか、作品を描くにあたって、インドのどの地域の方言を使うべきかを考えると悩んでおられた。話題作となった *Mitro murjani* や *Zindagīnāmā* の言語が標準ヒンディー語ではなく方言を用いていることを指しているのだが、作品の登場人物を描く際に、その人たちが普段用いている言語をそのとおりに表記することに専念したため、批判も多かったという。

今回翻訳紹介した作品は古い作品で、20年以上たって出版され、今になってみると、若いころの自分はロマンチックな作品を書いたものと照れておられた。作品のなかでラヴィイが叔母の足に手を触れて挨拶するしぐさと、マンノーがラヴィイと別れるときに両手を合わせて挨拶するしぐさがインドらしく印象的だったと伝えたところ、足礼は自分の若いころは家庭ではあたりまえだった習慣だが、今のインドの都会ではほぼ失われつつあり、古い作品にはこうした自分の幼少のころの記憶がそのまま記されているのだという。

寡作の作家とは聞いていたが、執筆に20年もかけた作品があるという話には驚いた。権威ある賞を受ける一方で、読者からの反発も多く、作品の題名の著作権をめぐる裁判で負けたことや、作品が舞台化されたときにも賛否両論であったことなど、話はつきなかつたが、詳しくは機会を改めて翻訳作品とともにご紹介したい。

南アジア文学を翻訳をとおして日本の読者に親しんでもらいたいという趣旨と今回の翻訳作品の出版は商用を目的としない旨にご賛同いただき、著者クリシュナー・ソープティ氏より翻訳の許可をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。無断転載を禁止いたします。



2016年3月7日 デリーにて